忠兵衛梅川 冥途の飛脚 幷三度笠

近松門左衛門作

上之巻

身をづくし難波に咲くや此花の、里は三筋に町の名も、佐渡と越後の相の手を、通ふ千鳥の淡路町、亀屋の世繼忠兵衛、今年二十歳の上はまだ、四年以前に大和より敷銀持て養子分、後家妙閑の介抱故、商ひ功者駄荷積り、江戸へも上下三度笠。茶の湯、俳諧碁、雙六、延紙に書く手の角取れて、酒も三ッ四ッ五ッ所、紋羽二重も出ず入らす。無地の丸鍔象眼の、國細工には稀男。色のわけ知り里知りて、暮れるを待ず飛ぶ足の、飛脚宿の忙しさ、荷を造るやらほどくやら、手代は帳面算盤を、奥口共にどや〳〵と、千萬兩の遣繰も、筑紫吾妻の取遣も、居ながら金の自由さは、一分小判や白銀に、翼の有が如くなり。町廻りの狀取立歸つて、それ〳〵と留帳つくる處へ、「誰そ頼もふ。忠兵衛宿に居やるか」と、案内するは出入の屋敷の侍。手代共慇懃に、「ヤア是は甚内様。忠兵

三度笠―三度にかく、此笠は落馬しても鼻を打たぬ樣に深くしたる編笠。我衣―角取れ―垢ぬけ。國細工云々―刀も珍しく男も田舎には稀なり。里知る―廓に明るい。奥口―置くにかけて家の奥と入口。狀取―町内の依

賴狀を纏める者
留帳—臺帳．
三度—飛脚差上せ云々—持たせ遣はすべし
なまり散す—銀に對して鉛に訛りをかけたり

衛は留守なれば御下し物の御用ならば、私に仰聞けられませ。お茶持ておじや」と待遇ふ。侍「いや〳〵下りの用はなし。江戸若旦那より御狀が來た。是お聞やれ」と、押開き、文面「來月二日出の三度に、金子三百兩差上せ申べく候。九日十日すなはち兩日の中、其地龜屋忠兵衛方より、右三百兩請取、内々申置候事共、埒明け申さるべく候。則飛脚の受取證文、此度上せ候間、金子受取次第、此證文忠兵衛に渡し申さるべく候。是此通仰下された。今日迄屆かぬ故、大事の御用の手筈が違ふ。何故斯樣に不埒な」と、鼻をしかめていひければ、手代「ハヽ御尤〳〵。去ながら、此中の雨續き、川々に水が出ますれば、道中に日が込み、銀の屆かぬのみならず、手前も大分の損銀。若し盜賊が切取か、道からふつと出來心、萬々貫目取られても、十八軒の飛脚宿から辨へ、芥子程も御損かけませぬ。お氣遣あられな」と、いはせも果ず、「是さ〳〵、いふ迄もない、御損かけては忠兵衛が首が飛ぶ。日限延ては御用の間が明により、それ故の穿鑿。迎ひ飛脚を遣はして、早速に持參せい」と、徒士若黨も刀の威光、銀ン拵へもうさん成、なまり散して歸りしが、又「賴みませふ〳〵。中の島丹波屋八右衛門から來ました。江戸小舟町米問屋の爲替銀、添狀は屆いたが、銀はなぜ屆きませぬ。此中文を進じても返事も御坐らず

使を遣れば、酢の蒟蒻のと、何時屆けさつしやるぞ。此者に渡して人をつけて下され。手形戻そと申さるゝ、サア金子請取ふ」と、立跨つて喚きける。主思ひの手代の伊兵衛、騒がぬ體にて、「是お使、八右衛門樣が其樣に、理窟臭い口上は有まい。五千兩、七千兩、人の銀を預つて、百卅里を家にし、江戸、大坂を廣ふ狹ふする龜屋、そこ一軒では有まいし、遲い事も無ふては。今でも旦那歸られたらば、此方から返事せふ。五十兩に足らぬ金、あたがしましう云まい」と、かさから出れば氣を呑まれ、使は眞面目に歸りけり。母妙閑は炬燵の側、離るゝ事も納戸を出、母「ヤア今のは何ぞ。丹波屋の金の屆いたは、慥十日も以前の事、何故忠兵衛は渡さぬの。今朝から二軒三軒の金の催促聞て居る。親仁の代から此家に、金一匁の催促得ず、終に仲間へ難義をかけず、十八軒の飛脚屋の龜鑑といはれた此龜屋。皆は心もつかぬか。忠兵衛が此比の素振が如何も呑込まぬ。昨今の者は知るまいが、地躰是の實子でなし。もとは大和新口村勝木孫右衛門といふ大百姓の一人子、母御前はお死やつて、繼母がよりのわざくれに、惡性狂ひも出來るぞと、父御前の思案で、是の世取に囉ひしが、世帶廻り商賣事、何に愚はなけれ共、此比はそはそはと、何も手に付かぬと見た。異見の仕度い事あれど、養子の母も繼母も同然と思は

納戸―無くにかく

わざくれ―やけばち

せはく—喧しく
びんぴ—ばつば
見世鎖比—夕方戸締りする頃
忠兵衛—雀の啼聲にかく
十文色—十文字と價十文の辻君とかく
木ゞ鼻云々—木ゞ鼻かむにて思ひやりのない者淵かけ—色仕掛け

ふか。せはくいふより云ぬ身を、恥入せふと思ふて目を睡つても、聞所見所は見て居る。何時の間にやら大氣になり、延の鼻紙二枚三枚　手に當り次第重ねながら鼻拭やる。過行れし親仁の咄しに、鼻紙びんぴと遣ふ者は曲者じやといはれたが、忠兵衛が内を出さまに、延紙三折宛入て出て、何程鼻をかむやら、戻りには一枚も殘らぬ。身が達者なの、若いのとて、彼の樣に鼻かんでは、何處ぞで病も出ませふ」と、よまひ言して入ければ、丁稚小者も笑止がり、「早ふ歸つて下されかし」と、待ッ日も西の戻足、見世鎖比に成りにけり。鷲籠の鳥なる梅川に、焦れて通ふ廓雀、忠兵衛はとぼくと、外の工面内の首尾、心は蜘手かくなはや、十文色も出て來るは、南無三寶、日が暮ると足を空に立歸り、門口には著けれ共、留守の内に方々の催促使ひ、妙閑の耳に入ッて、如何樣の首尾になつたも氣遣はし。誰ぞ出よかし、内證を篤と聞て入たし、と我家ながら敷居高く、内を覗けば飯焚の、萬めが酒屋へ行ッ躰なり。彼奴は木で鼻もぎとふ者、只は云ふまじ、濡れかけて、だまして問はむ、と思案する間にによつと出る。樽持た手をしかとしむれば「アレ旦那樣の」と聲立る。忠「アヽかしましい。こりや粹奴、おれが首だけ懷んで居る。思ひ内にあれば、色外にあらはるゝ、目付をそちも見て取たか。可愛ら

しい顔付で、氣毒がらすは如何じやいやい。いつそ殺せ」と抱付ケば、萬「ム、嘘付んせ。毎日〳〵新町通ひ、延の鼻紙二折三折、結構な鼻をかまんすもの。何んの私等に手洟もかみたふあるまい。彼の嘘付が」と振切るを、又抱付て、「そちに嘘付て何の德。實じや〳〵」といひければ、萬「それが定なら、晩に寢處へ御座んすか」忠「ヲ、成程〳〵忝い。それに就て今ちよつと問ふ事有」といひけれ共、「それも寢處でしつぽりと聞ませふ。必ずだましにさんすなる。そんなら私はお湯沸いて、腰湯して待ます」と、いひ捨振切り走りけり。忠兵衛はうそ腹の立煩ひて居る處に、北の町からいかつけに來るは誰じや。「ヤア、中の島の八右衛門、彼奴に逢ふてはむつかし」と、朱の力へ出違へば、八「是忠兵衛、外すまい〳〵」と聲懸られ、忠「ヤ八右衛門、此中は久しい。昨日も、今日も、一昨日も、人遣ろ〳〵と思ふて何やかやと延引した。めつきりと寒いが親仁の疝氣は、婆婆樣の齲は。アいかふ酒臭い、過しやるな〳〵。明日は早々人遣ふ。や、れそが言傳したぞや、近日一座致したい」と、たくしかくれば八右衛門「をけやい。口三味線に乘せかけても、乘る樣な男でない。其方が商賣は三度でないか、身が方へ上つた江戸爲替の五十兩は何として屆けぬ。五日三日は了簡も有ぞかし。心易いは各別、高駄賃かくからは

うそ腹—腹の立つにかく
ぬかつげ—威張る
れそ—相手の女
たくし—鎖絡し
駄賃かく—駄賃をとる

大事の家職。十日に餘れど埒明ず、今日も使を遣たれば、手代奴がかさ高な返事した。よもや他へは左樣有まい。八右衞門をなぶるか。北濱、靱、中の島、天滿の市の側迄、親仁共いはるゝ八右衞門、なぶつて能くばなぶられふが、金は今日請取。但中間へこたへふか。先お袋に逢ふ」と、内へ入るを引留め、母「さりとては誤つた。是手を合すたつた一言聞てたも。拜むく」と呼けば、八「又口先で濟そふや、梅川をだましたと男の意氣は違ふた。いふ事あらばサア聞ふ」と、苦々敷きめ付られ、母「是其聲を母が聞けば死んでも一分立ぬ事。一生の御恩ぞ。さりとては面目ない」と、はらくと泣けるが、「何を隱そふ、此金は十四日以前に上りしが、知ての通り梅川が田舍客、金ずくめにて張合かける。此方は母、手代の日を忍んで、僅二百目三百目のへつり金、追倒されて生た心もせぬ處に、請出す談合極つて、手を打ぬばかりといふ。川が歎き、我等が一分、既に心中する筈で、互の咽へ脇指の冷やりと迄したれ共、死なぬ時節かいろくの邪魔ついて、其夜は泣て引別れ、明れば當月十二日、其方へ渡る江戸金がふらりと上るを、何かなしに懷に押込て、新町迄一散に、どふ飛んだやら覺えばこそ。段々宿を賴んで、田舍客の談合破らせ、此方へ根引の相談しめ、彼の五十兩手付に渡し、まんまと川を取

金ずくめ云々―金力で思兵衞と爭ふ

其内―其内逢はう

留しも、八右衛門と云男を友達に持し故と、心の内では朝晩に、北に向ひて拜むぞや。さりながら、如何に念比なればとて、先に斷り立置て遣へば借るも同然、跡では如何と思ふ内、其方からは催促。嘘に嘘が重つて、初手の眞實も虚言となれば、今何をいふても誠には思はれじ。されば共遲ふて四五日中、外の金も上る筈、如何樣共仕送つて、一錢一字損かけまじ。此忠兵衛を人と思へば腹も立つ、犬の命を助けたと思ふて了簡賴入。是を思へば世の中に、處刑者の絶ぬも道理。此上は忠兵衛も盜みせふより外はなし。男の口から斯樣の事いはれふものか推量あれ。咽より劒を吐くとても、是程には有まじ」と、絞り泣にぞ泣居たる。鬼とも組ん八右衛門、ほろりと涙ぐみ、「いひ憎い事能ふいふた。丹波屋の八右衛門、男じや了簡して待てやる。首尾能ふせよ」といひければ、忠兵衛土に額を付け、「忝い〳〵。父二人、母三人、親は五人持たれ共、其恩よりは八右衛門、貴殿の御恩忘れぬ」と、とかふは涙計なり。八「左樣思へば滿足、サア人も見る其内」と、立別れんとせし處に、内より母の聲として、「ヤア八右衛門樣か、忠兵衛是へ通しましや」と、聲かけられて詮方なく、もぢ〳〵連立ち入にけり。母は律義一遍に、「先程はお使又御自身のお出、御尤〳〵。是彼方の金の届いたは十日も以前、何として延引ぞ。胸に

とつくと手を置て、能ふ思案して見や。遲ふ屆けば飛脚は入らぬ、何が其方の商賣ぞ。サア今渡して上ましや」と、いへ共渡す金はなし。八右衛門も底意は聞、八「是お袋、恥しながら八右衛門が、五十兩や七十兩、急に入事もなし。是より直に長堀迄參れば、明日でも」と立んとすれば、母「いや〳〵大事のお金預れば氣遣で夜も寢られず。なふ忠兵衛、きり〳〵渡しや」とせり立られ、母「あつ」といふより納戸に入ッ、迂路〳〵しても金はなし。入れもせぬ戸棚の鍵、明る顏してぴんといふ、鎰の手前も恥しく、胸に願立て神おろし、狂氣の如く氣を揉しが、「ヤレ有難や、此櫛箱に燒物の鬢水入、これ氏神」と三度戴き、紙押廣げくる〳〵と、駿河包に手ばしこく金五十兩墨黑に、似せも似せたり五十杯、母には一杯參らせし、其惡智惠ぞ勿躰なき。母「是々八右衛門殿、今渡さいでも濟む金ながら、母の心を安める爲、男を立る其方と見て、詮方なふ渡す金、さつぱりと請取て、母の心を安めてたも。包は解に及ぶまじ。いらふて見ても五十兩、如何してたもる」と差出す。八右門衛手に取て、「ハテ誰ぞと思ふ、丹波屋の八右衛門、請取に子細はない。是お袋、江戸爲替慥に請取ました。不動參りに待まする」と立處を、妙閑誠と思ひてや、「是忠兵衛、仕切爲替の作法は、金と手形と引替へ。若し御持參なきならば、

きり〳〵じゃぐせず

神おろし—冥助を祈る　鬢水入—髮をとくに用ふる眞鍮の水入にて塗物製もあり　駿河包—駿河半紙　五十杯—五十兩　うまく欺した

佛の顔云々―諺に佛の顔も三度撫れば怒るとあるに之は親を三度欺した

仕合馬―うましにかく

うちがひ―帽袋

一筆ちよつと書せましや。物は念じや」といひければ、忠「ヲヽそれ〳〵、母は無筆の一文字も讀れね共、しるし計に一筆」と、硯出して朐せすれば、「易い事〳〵。忠兵衛文言是見や」と、筆に任せて書散す、「一ッ金子五十兩、請取申さず候。右約束の通、晩には廓で飲かけ、我等はたいこ實正明白なり。何時成リ共騒の節、屹度參上申べく候。仍て紋日の爲、鬢水入件の如し」と、阿房のたら〳〵書散し、八「さらばお暇申そふ」と、表へ出れば妙閑は、「書た物こそ物云へ」と、又だまされし正直の、親の心や佛の顔も、三度飛脚の江戸の左右、待夜も漸更にけり。おもてに鈴の音、「こりや〳〵駄荷が著たぞ。中戸〳〵」と聲高に、手ん手に葛籠擔込む。忠兵衛親子機嫌能く「サア拍子が直つた、來年も仕合馬、馬子衆に酒よ煙草よ」と、硯控へつ帳付て、家内どんどと賑へば、手代の伊兵衛けうとけに、「なふ堂島のお屋敷から、金三百兩九日に來る筈、前狀が上つた、何とて遲い、とお侍の甚内殿が睨付て歸られた。何んと〳〵」といひければ、宰領が打がひより、「其三百兩合點。これ急々の御用、今夜中にお屆け」方々の爲替金高八百兩ぐわらり〳〵と取出す。忠兵衛いよ〳〵勢ひよく、「白銀は内庫へ、金子は戸棚へ。母者人私は直に此小判お屋敷へ持參する。人の金を預れば、表も氣を付ゞ早ふ締め、火の用心

が一大事、戻りは少と遲ふても、駕籠で往けば氣遣ない。夜食仕廻ふて早や寢よ」と、金懷中に羽織の紐、結ぶ霜夜の門の口、出馴れし足の癖になり、心は北へ行く行くと思ひながらも身は南、西横堀を浮々と、氣に染付し妓が事、米屋町迄歩み來て、忠「ヤア是は堂島のお屋敷へ行筈、狐が化すか、南無三寶」と引返せしが、「ムヽ我知らず此處迄來たは、梅川が用有て氏神のお誘ひ、ちよつと寄て顏見てから」と、立歸つては、「いや大事、此金を持ては遣ひたからふ。措てくれうか、往て退ふか。往もせい」と、一度は思案二度は不思案、三度飛脚、戻れば合せて六道の、冥途の飛脚と三百

一度は思案云々―一度は思慮すれども二度は無分別になつて途に冥途に行くと也　浮れ聟―聟客をさす　紅葉して―青が炭火で紅くなる位はよしや云々―松の太夫や梅の天神とは位が劣つ、も並べて見たと哀深しと也　見世女郎―天神の次にて價廿二匁（遊廓）

中之巻

歌　ゑい〳〵鴉がな鴉がな、浮氣鴉が月夜も闇も、首尾をもとめて逢ふくとさ。青編笠の紅葉して、炭火ほのめく夕べ迄、思ひ〳〵の戀風や、戀と哀れは種一つ、梅薫しく松高き、位はよしや引締て、哀れ深きは見世女郎、さらさ禿が知邊して、橋が架たや佐渡屋町、越後は女主人とて、立寄る妓も氣兼せず。底意殘さぬ戀の淵、身の憂きしほで梅川も、此處を思ひの定宿と、餘所の勤もかきの本、島屋をちよつと島隱れ、梅「申、濟さ

橋が架けたや—取持つて見たや 越後—揚屋の名にて主婦をきよと云ふ かき本—歌と柝本とかけて、ほの〻〻と云々の歌を寄すうてず云々—野呂間の客に貫めちる 貸す—見てもらひに 豐川、高瀬—妓の名 ろませ云々—擊の鼈鼈にて六、七、十、三、差す腕—棹す櫂にかく はま云々—八、三九、五、六、四 (巢林子評釋) 一つは鳴渡瀬—妓名と一つは酒呑めるとかく

ん、今日は島屋で、彼の田舍のうてずにせびらかされて頭が痛い。忠樣は未だ見へぬかゐ。せめてのゆかりに、此方樣の顏が見たさに貸に來た」と、入るさの門の障子戸も、明る晨の形見かや。「さつても能ふ御座んした。あれ二階にも、女郎樣達が大勢遊びに御座んして、お客待間の酒事、拳をして御座んする。此方さんもお氣晴しに、一拳して酒一ツ。傍輩樣も御座んす」と、上る二階の隙間風、男交ずの火鉢酒、拳の手品の手も撓く、ろませ、さい、とうらい、さんな、同じ事とよ豐川に、戀の高瀬が差す腕には、はま、さんきう、ごう、りう、すむゐ、「それ〳〵何んと。地躰一ツは鳴渡瀬樣」爲あれ梅川樣の御座んした。なふ能い處へ來て下んした。此方樣拳の上手、宵から千代歲樣に仕付られて無念な、敵取て下んせ。銚子直しや」といひければ、撞ア、うたての酒や、拳をする氣もあらばこそ。此梅川が今の身を、少しは泣ひて囉ひたや。田舍の客が身請の事、今日も今日とて島屋にて、理窟を詰て强請事、腹が立つやら憎いやら、とはいひながら是は先、忠兵衞樣は後手といひ、宿の勢力一ツにて、手付も渡し、約束の日ぎり切れるも言延し、今日迄は繫りしが、忠樣も世帶持、養子の母御の手前といひ、屋敷方歷歷の町方を引受て、東路かけての大事の商賣。如何成事が邪魔になり、田舍の客に請ら

れては、我ガ身一ツは死でも退ふ。天神太夫の身でもなし、さもしい金に氣が觸れた、見世女郎の淺ましさ、と世間の唱へ、傍輩の掃部殿を始めとして、格子女郎衆の手前も有、忠樣と本意を遂げ、とや斯ふ人に諭はれし、面が脫ぎ度ふ御座んす」と、泣しみづきて語るにぞ。一座の女郎身の上に、思ひ合せて尤と、連れて涙を流せしが、「アヽいかふ氣がめいる。わつさりと淨瑠璃にせまいか。禿共ちよつと往て、竹本頼母樣借て來い」

格子女郎―京都の天神に同じ（異本洞房語圖）

傾城に誠云々―此句遊君三世相に出でたり

梅「いや先に鬢付ヶ買ふとて聞ましたが、芝居から直に越後町の扇屋へ往んしたけな。私は頼母樣の弟子なれば、能ふ似た處を聞かんせ。サア三味線」と夕霧の、昔を今に引かけて、文句「傾城に誠なしと世の人の申せ共、それは皆僻事、譯知らずの詞ぞや。誠も嘘もと一つ。假へば命擲ち、如何に誠を盡しても、男の方より便なく、遠ざかる其時は、心矢竹に思ひても、斯した身なれば儘ならず、自ら思はぬ花の根引に逢ひ、掛し誓ひも嘘となり、又始より僞りの、勤計に逢ふ人も、絶ず重ぬる色衣、終の寄邊となる時は、初の嘘も皆誠。とかく唯戀路には、僞りもなく誠もなし、緣の有のが誠ぞや。逢ふ事かなはぬ男をば、思ひ〳〵て思ひが積り、思ひざめにもさむるもの。辛やしよざいと恨むらん。恨まば恨め、いとしいといふ此病、勤する身の持病か」と、戀に浮世を投首の、

しよざい―所在なき

花車―女主人の渾名をさす

入らずと―入らずとも

耳打―密に知らす

心の氷―我金なければ云ふ

酒もしらけて醒にけり。中の島の八右衛門、九軒の方より淨瑠璃聞付々、「ヤア皆聞知た妓の聲々。花車内にか」とつゝと入、柄差箒逆手に取り、二階の下から板敷をぐはた〳〵と突鳴し、八「女郎衆あんまりじや、此處にも人が聞ィて居る。如何成男でそれほどに戀しいぞ。男がなふて寂しくは、お氣には入らずと、是にも一人貸てやろか」と喚きける。梅川はそれ共知らず、「デモ逢たいが定じやもの、憎いなら來て叩かんせ。清様、下なは誰さんじや」清「イヤ大事御座んせぬ。中の島の八様」と、聞より梅川はつとして「是々。彼の様には逢ともない、皆様下て下さんせ、私が二階に居る事を、必〳〵いふまいぞ」妓「其處らは粹じや」と打頷き、皆々座敷に出ければ、八「ヤア千代歳様、鳴渡瀬様、歴々の御參會。梅川殿は宵の口、島屋を囉ふて往なれたけな。忠兵衛も來だ見へ そもないの花車此處へ寄つしやれ。女郎衆も禿共も、忠兵衛が事に付き、耳打て置く事が有。此處へ〳〵」とひそ〳〵すれば、妓「ハアヽ何事やら氣遣ひな」と、いへ共二階の梅川に、惡い噂も聞せんかと、皆氣を配る折節に、忠兵衛は世を忍ぶ、心の氷三百兩、身も懐も冷る夜に、越後屋に走著き、内を覗けば八右衛門、横座をしめて我評判。はつと驚き立聞す。二階には梅川が、心を澄す壁に耳、漏るゝぞ仇の始なる。斯と知らねば八右衛門、

爲ずく云―原本に「爲すくミ」

小尻が詰る―末が切迫する

「斯ふ云へば忠兵衛を憎み猜むやうなれど、爲ずく云ぞ。彼の男が身の成果がかはいひ。尤も千兩二千兩、人の金をことづかり、暫しの宿を貸すけれ共、手金とては家屋敷、家財かけて十五貫目、廿貫目に足らぬ身躰。大和の親が長者でも、龜屋へ養子に越すからは、高の知れた百姓。斯ふいふ此八右衛門も若い者の習ひ、一年に五百目一貫目、揚屋の座敷も踏ねばならぬ。身にも應ぜぬ忠兵衛が梅川にのぼり詰め、島屋の客と張合、五月より此方大方は揚詰、身請も此比極り、百六十兩の内、五十兩手付渡したげな。それゆへに方々の屆け金が不埒になり、當る處が嘘八百、いかふ小尻が詰つて來た。今でも梅川が、サア出るに極まらば、借錢も有ふし、泣いても二百五十兩、天から降ふか、地から涌ふか、盗みせふより外はない。彼の手付の五十兩、何處から出たと思召す。身が方へ來る江戸爲替、中で取て遣ふたを、それ共知らず請に行、養子の母御がいとしほや　上つた金は知てなり、渡せ〳〵とせつかれて、忠兵衛が戻した小判お目にかけふか」と、一ト句取出し、「コレ斯ふ見た處は五十兩、さらば正躰顯はして、獄門の種御覽あれ」と、包を切て切解けば、燒物の鬢水入。主人も、一座の女郎も、「はあょ」とばかりに怖氣立ち、身を縮むれば二階には、顔を疊に摺付ヶて、聲をかくして泣居たり。短氣は損氣の

公界―人中
潛上―高慢

しやうげ烏―烏名にあちげ何とせんとがつかりするとも也

肩のわるい―運が惡い

忠兵衛「傾城は公界者、五十兩の目腐銀取替た潛上、若い者に恥かゝせ、川が聞たら死たかろ。懷中の三百兩、五十兩引拔て、頬へ打付け、存分云ひ、我身の一分、川が面目雪いでやらふ。アヽされ共是は武士の金、殊に急用、妥が大事の堪忍」と、手を懷中へ幾度か、とやせんかくやしやうげ烏、躾の嘴の齟齬ふ、心を知らぬぞ是非もなき。八右衛門水入取上、八「これも買はゞ十八文、如何に相場が安いとて、五十兩を二分五厘替へ神武以來無い事。友達さへ是なれば、他人をかたるは御推量、此次は段々に申著切から家尻切、果は首切、如何にしても笑止な。あの如くに亂れては、主親の勘當も、釋迦、達磨の異見でも、聖德太子が直に敎化なされても、いかな〳〵直らぬ。廓で此沙汰ばつとして、寄せつけぬ樣に賴みます。梅川殿へも吹込んで、此方から挨拶切り、島屋の客にさらりつと請させて仕廻度い。皆彼の流が心中か、女郎の衣裳を盗むか、碌な事は出來さず、片小鬢剃こぼされ、大門口に晒され、友達の一分捨さする、人でなしとはあれが事。可愛くば寄せて下さるな」と、語るを聞けば梅川も、悲しいといとしいと、身の墓なさと搔交て、胸引裂ける忍び泣き、梅「アヽ刃物がな、鋏でも、舌を切ても死たい」と、悶へ伏たる苦みを、下には各々推量して、鼓「ひよんな心にならんした。肩の惡い梅

川様、いとしほいは、川様お一人に留めた」と、下女、料理人、うら若き禿も袖を絞りけり。忠兵衛元來惡いむし、押へかねてずんと出、八右衛門が膝にむんずと居懸り、「是丹波屋の八右衛門殿、常々の口程あつて、ヲヽ男じや、見事じや。三人寄れば公界。忠兵衛が身躰の棚下ししてくれる、忝ない。コリヤ此水入も男同士、母の心を安める爲、請取てくれるかと、謎をかけて渡したを、此忠兵衛が五十兩損かけふかと氣遣さに、廓三界披露して、男の一分捨さする。但又島屋の客に賄賂取ッて、梅川に藁を焚き、彼方へ遣ふといふ事かおいてくれ。氣遣ひすな五十兩や百兩、友達に損懸る忠兵衛ではごあらぬ。アヽ八右衛門様、八右衛門奴、サア金渡す、手形戻せ」と、金取出し、包を解んとする處を、八右衛門押へて、「こりや待て、やい忠兵衛、餘程の痴氣を盡せ。其心を知たるゆへ、異見をしても聞ゞまじと、廓の衆を賴んで、此方から除て囉ふたらば、根性も取直し、人間にもならふかと、男づくの懇だけ。五十兩が惜ければ、母御の前でいふはいやい。てんがうな手形を書き、無筆の母御を宥めしが、是でも八右衛門が屈かぬか。其金がさも三百兩、手金の有ふ様もなし、定て何處ぞの仕切金、其金に疵を付け、八右衛門仕た様に鬢水入では濟まいぞ。但代りに首遣るか。のぼり詰る其手間で、屈ける

棚下し―蔑惡殘ちず並べ立る
藁を焚き―騷動する
てんがうーいたづら
屈かぬか―不行屈か

始終―四十にかく

ぎしみ―軋り

籠櫃―牢屋

潰に立―憔悴になる事

處へ屆けて仕廻へ。エヽ性根の据らぬ氣違者」と、割つ碎いつ叱れ共、忠「いや〳〵仁義立措てくれ。此金を餘所のとは、此忠兵衛が三百兩持まいものか。女郎衆の前といひ、身躰を見立てられ、猶返さねば一分立たぬ」と、包解いて、十、廿、三十、始終詰らぬ五十兩、くる〳〵と引包み、「これ龜屋忠兵衛が人に損をかけぬ證據、サア請取れ」と投付る、八「男の面へ何とする。忝いと禮いふて、返し直せ」と投戻す。忠「をのれに何んの禮云はふ」と、又投付つ投返し、腕捲りしてぎしみ合ふ。梅川涙に暮れながら、梯子駈下り、「なふすつきり私が聞ました。皆島八樣のがお道理じや。これ手を合せる、梅川に許して下さんせ」と、聲を上て泣けるが、梅「情なや忠兵衛樣、何故其樣に逆上らんす。そもや廓へ來る人の、假へ持丸長者でも、金に詰るは有ならひ、此處の恥は恥ならず。何を當に人の金、封を切て撒散し、詮義に逢ふて籠櫃の繩かゝるのと云ふ恥と、此恥と換らるか。恥かく計か梅川は、何となれといふ事ぞ。とつくと心を落し付、八樣に詫言し、金を束ねて其主へ、早ふ屆けて下さんせ。私を人手に遣ともない、それは此身も同じ事。身一ツ捨ると思ふたら、皆胸に籠て居る。年とても先あ二年ゝ下。宮島へも身を仕切り、大坂の濱に立ても、此方樣一人は養ふて、男に憂目かけまい物。氣を靜めて下さんせ。

淺ましい氣にならんした。斯ふは誰が仕た私が仕た、皆梅川が故なれば、忝いやら、としいやら、心を推して下さんせ」と、口說き立〳〵、小判の上にはら〳〵と、涙は井出の山吹に、露置き添ふる如くなり。忠兵衛氣も有頂天、前後括らぬ間に合筵、敷金の事思ひ出し、「はて喧しい。此忠兵衛をそれ程痴氣と思やるか。此金は氣遣ない、八右衛門も知て居る。養子に來る時、大和から敷金に持て來て、餘所へ預け置た金、身請の爲に取戻した。花車此處へ」と呼寄せ、「先へ手付に五十兩、今百十兩、合せて百六十兩、是川が身の代、是又四十五兩、いつぞやしめた帳面、買懸りの借錢、五兩は遣手、九月からの揚錢、萬事十五兩程と覺えたが、算用が喧しい、廿兩で帳消や。此十兩は、此方へ御祝義やら骨折分、林も玉も、五兵衛も一兩宛じや。來い〳〵」と、金銀降らす邯鄲の、夢の間の榮耀なり。忠「サア今の間に埒明、今宵の中に出る樣に、賴む〳〵」といひければ、主人俄に勇みをなし、「無い程は無いも金、有段には有物かは。氣を死そふ事でない。川樣嬉しう思はんしよ。ヤ大事の金を持て往く、林も玉も供しや」と、引連れ走り出にけり。八右衛門は濟ぬ顏、「誠とは思はね共、只さへ囉ふ此小判、返す物をいはれぬ辭義。五十兩慥に請取た。手形返す」と投出し、「梅川殿能い男持ッてお仕合。妓樣達これに」

邯鄲―盧生が邯鄲の旅舍にて五十年榮花の夢を見た事

いはれぬ辭義―要らぬ辭儀

月行事―楼主の惣代にて毎月交替す

もつとまかせ―よしきた

滅多―滅法

地獄の上―急難を逃れる譬

と、金懐中し出ければ、蛇「私等もいざ歸りましよ。川様目出度ふ御座んす」と、皆宿宿へぞ歸りける。忠兵衛氣をせいて、「花車は何故遅いぞ、五兵衛往てせつてくれ」と立に立ッてせきけれ共、五「イヤ身請の衆は親方が濟んでから、宿老殿で判を消し、月行事から札取らねば、大門が出られませぬ。ま少と隙が入りませふ」忠「エ、其處邊を早ふこりや賴む」と、又一兩投出す。五「おつとまかせ」と足輕く、走る三里の灸よりも、小判の利ぞ應へける。忠「サァ〳〵此間に身拵へ、べた〳〵した取姿、帶もきりょと仕直しや」と、滅多に急げば、梅「何ぞいの、一代の外聞、傍輩衆へも盃事、暇乞も譯能ふして、寛りと出して下さんせ」と、何事なく勇む顏、男はわつと泣出し「いとしや何も知らずか。今の小判は堂島のお屋敷の急用金、此金を散しては身の大事は知れた事。隨分堪へて見つれ共、友女郎の眞中で、可愛ひ男が恥辱を取り、和女の心の無念さを晴したいと思ふより、ふつと金に手をかけて、最ふ引れぬは男の役、斯ふなる因果と思ふてたも。八右衞門が面相、直に母に吐す顏、十八軒の仲間から、詮義に來るは今の事。地獄の上の一足飛、飛んでたもや」と計にて、縋付て泣きければ、梅川「はあ」と慄出し、聲も涙にわな〳〵と、「それ見さんせ。常々いひしは爰の事。何故に命が惜いぞ、二人死ぬれば

本望、今とても易い事。分別据へて下んせなふ」忠「ヤレ命生やふと思ふて此大事が成物か。生らるょだけ添はるょだけ、高は死ぬると覺悟しや」梅「アヽそふじや。生らるょだけ此世で添はふ。今にも人が來る爲、爰へ隱れて御座んせ」と、屏風の陰に押入し「ア、私が大事の守を、内の簞笥に置て來た。是が欲しい」といひければ、忠「ハテ斯る惡事を仕出して、いかな守の力にも、此科が遁れふか。兎角死に身と合點して、我は和女の囘向せん。和女は此忠兵衛が囘向を賴む」と、屏風の上顔を出せば、梅「ハアヽ悲しや忌々しい ちやつと措て下さんせ。嫌な物に能ふ似た」と、屏風にひしと抱付、咽返りてぞ歎きける、越後主從立歸り、「サア何處もかも埒明た。お出の勝手近ければ、西口へ札が廻つた」と、いへども夫婦はわな〳〵と、「さらば〳〵」も慄聲、主人「おさぶそふなが酒はいの」二人「酒も喉を通りませぬ」主人「目出度いと申そふか お名殘惜いと申そふか、千日いふても盡ぬ事」二人「其千日が迷惑」と、木綿付鳥に別れ行く、榮耀榮華も人の金、果は砂場を打過て、跡は野となれ大和路や、足に任せて三重

高―つまり

ちやつと措いて―屏風の上に出た頭が獄門に似たれば云ふ

千日―刑場
砂場―地名と金を砂にするとかく
大和路―山となれにかく

忠兵衛
梅川相合かご　下之卷

翠帳紅閨—女の美しき閨、此歌松の翠葉二卷にあり

四つ門—四つ時に廓の大門を鎖す

翻れ口—翻れると地名とにかくと

炭の埋火云々—炭火が消えて白くなるを霜に寄せたり

一蓮托生—相合籠に喩ふ

比翼煙管—雁首一つ吸口二つある煙管

値の露—露は花代にて露は翠羅貨にかけたり

庚申—叶ひにかく

詠クセ「翠帳紅閨に枕並べし閨の内、馴し歌襖の終夜も、四ッ門の跡夢もなし。さるにても我夫の、秋より先に必ずと、仇し情の世を頼み、人を頼みのヲ綱斷れて、夜半の中戸も引替て、人目の關にせかれ行く、昨日の儘の鬢付や　髪の髷目のほつれたを、髷て進じよと櫛を取、手さへ涙に凍ゑつき、冷たる足を太股に、相やひ炬燵相輿の、駕籠の息杖生てまだ、續く命が不思議ぞと、二人が涙翻れ口、明ぬ間は暫しとて、駕籠の簾をあげてさへ、膝組交す駕籠の内　狭き局のありし夜の、逢ふ瀬に似たは似たれ共、炭の埋火何時しかに、朝の霜と置かへて、夜半の嵐に呼れては、應ふる野邊の禿松、過し其の夜が思はれて、いとど涙の種ならん。思何ぐどくと思ふぞや。これぞ一蓮托生」と、慰めつ又慰みに、比翼煙管の薄烟、霧も絶へぐ晴れ渡り、麥の葉生に風荒れて、朝出の賤や火を囉ふ、野守が見る目恥しと、駕籠立させて暇を遣る、値の露の命さへ、惜からぬ身は惜からず。猶も惜まぬ徒歩素跣、惜むは名殘計ぞや。終に著馴れぬ綿帽子、私が顔より此方樣の、肌にこれをと風防ぐ、ぴらり帽子の紫や、色で逢しはは昔、今日は眞身の女夫合、頼まば願ひ庚申、庚申堂よと伏拜み、振返り見る勝曼の、愛染樣に愛敬を、祈る芝居の子共衆や、道頓堀のいろくや、馴れし廓のそれぞとは、紋で覺え

し提灯の、中にはかなや槌屋内、此木瓜に打添て、私が紋の松皮の、松の千歳を祈りしに、定めぬ契り提灯の、消ゆる命の夕には、此紋付て我中の、經帷子と觀念し、冥途の道を此樣に、手を引ふぞや引れふと、又取交し泣く涙、袖の氷と閉合り。誰が關据ぬ道なれど、問ひ〳〵行ければはか行ず。今朝の姿を其儘に、素足に雪駄しみづけば、空に霧の一ト曇、霰交りに吹く木の葉、ひらり平野に行懸り、「爰は知る人多ければ、此方へ〳〵」と袖覆ひ、里の裏道畔道を、すぢりもぢりて藤井寺、あれ〳〵あれを見や。何處の田舍も戀の世や　背門に菜を摘む十七八が、歎門に立たは忍びの夫かゑ、野風身の毒、此方入らしやんせゑ」餘所の睦言妬しく、それ覺えてか何時の事、彼の初雪の朝込に、寢衣ながらに送られし、大門口の薄雪も、今降る雪もかはらねど、變り果たる身の行へ。我故染ていとほしや、元の白地を淺黄より、戀は轡田の八幡に、起請誓紙の筆の罰、和女を除てと泣く涙、歌　暫し人目の、ヤ許しはあれど、申是なふ去りとては、私が身とても儘にはと、末は涙に果しなく、延紙の三ツ折絞るにも、裙に窶るゝ小笹原、霜に枯野の薄原、茫々さら〳〵颯と鳴つたは、我を追手の尋ぬるよと、覆重り影隱し、振さけ見れば人にはあらで、妻戀鳥の羽音に怖る身と成は、如何なる罪の報ひぞと、口說き歎きて行く姿、

槌屋―樽川の抱主
木瓜―忠兵衛の紋所
松皮―松皮菱といふ紋所

朝込―朝大門の開く時期

小笹原―謎に傷持つ足に笹原とあるをとれり

葛城云々―一言主神容貌醜き故晝は隱れ夜出て葛の岩橋を渡す（閑田耕筆）

飴雪云々―甘言を以て實を吐かせ

鐘も云々―金にかけて旅費乏しくなる事をいふ

諸勸進―物もらひ

泣くか、笑ふか、富田林の群鴉、切て一夜の心なく、咎むる聲の高間山、彼の葛城の神ならで、晝の通路つょましく、身を忍ぶ道戀の道、我から狹き浮世の道、付の內峠袖濡れて、岩屋越とて石道や、野越へ山暮れ里々越へて、行は戀ゆへ三置澄る世の掟正しく、畿內近國に追手かょり、中にも大和は生國とて、十七軒の飛脚問屋、或は巡禮古手買、節季候に化て家々を覗きの機關、飴賣と、小共に飴を甜らせて、口を拷るや畏の烏、網代の魚の如くにて、遁れがたなき命なり。無慙やな忠兵衛、我さへ浮世忍ぶ身に、梅川が風俗の、人の目立つを包みかね、借駕籠に日を送り、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜を明し、廿日餘りに四十兩、遣ひ果して二分殘る、鐘も霞むや初瀨山、餘所に見捨て親里の、新口村に著けるが、「是お梅此處は我ガ生れた在所、二十歳まで育つて覺えしが、師走の果に此如く、諸勸進しょ商人、春とても無い事。あれ彼處にも立ッて居る。野外れにも二三人、胸騷ぎもして來た。四五町往けば、ほんの親孫右衛門の家なれ共、不通といひ繼母なり。此藁葺は忠三郎とて、下作あてた小百姓、腹の下から馴染、賴母しい男。先爰へ」と打連れ、忠三郎殿宿にか、久しうお目にかょらぬ」と、つょと入れば、嘘と思しく、「誰で御座るぞ。これのは今朝から庄屋殿へ詰られ、今は留守で御

おか様—内儀
久離を切—縁切る事
お讃談—お說教
いさ汁—いさ知ちずにかく

座る」といふ。母「ムヽ忠三殿におか様はなかつたが、此方は誰でばし御座るぞ」玄「アヽ私も三年あとに是の内へ嫁入して、前かたの知る人は、どれが何ふも知りませぬ。ヤアほんに皆様は若し大坂でば御座らぬか。これの親方孫右衛門様の繼子忠兵衛殿と申すが、大坂へ養子に往て、傾城買ふて他人の金を盜み、其傾城連れて走られたといふて、代官殿より御詮義。孫右衛門様は疾ふに親子の久離を切り、構はぬとはいひながら、眞實の親子なれば、年寄ての氣苦勞。これのはお馴染の事なれば、若し此邊り狼狽へて、見付られてはいとしい事と、内外へ氣を付らるゝ。庄屋殿から呼に來る、寄會の、印判の、節季師走に此在所は、傾城事で沸返る。なふうたてのお傾城殿や」と遠慮もなくぞ語りける。忠兵衛はつと思ひ、「如何にも〳〵、大坂でも其取沙汰。我等は夫婦連で年籠に參宮の心ざし、懐しさに寄ました。ちよつと呼ふで來て下され、立ながら逢ふて帰り度い。大坂者といはずに賴みます」といひければ、玄「扨はいかふお急ぎか、往て呼ふで來ませふ。さりながら、鎌田村のお道場へ、京のお寺のお下り毎日のお讃談、先から直にお道場へ參られたも、いさ汁の下さし燻て下され」と、襷がけして走行く。跡の門口梅川が、はたと鎖て鎰かけ、「是はほんの敵の中、大事ないか」といひければ、母「忠三郎

といふ者は、百姓に稀な男氣を持たもの、賴んで一夜逗留し、死ぬるとも此處、古郷の土に身を成して、生の母の墓所、一所に埋れ、嫁姑の未來の對面させたい」と、目もうろ〳〵となりければ、梅「それは嬉う御座んせふ。去ながら、私が母は京の六條、定し此間詮義に人が往つらん。日比が眩暈持なれば、何ふならんした事やら、ま一度京の母樣にも、一目逢ふて死度いぞ」梅「ヲ、道理共。我レも和女のお袋に、聟じやといふて逢ひ度い」と、人目なければ抱合ひ、涙の雨の横時雨、袖に餘りて窓を打つ。「ハア、降て來たそふな」と西受けの竹柵子、反故障子を細目に明て、見やる野風の畠道、後しぶきに降る雨は、傾けて急ぐ阿彌陀笠、道場參り打連れしは、あれ皆在所の知た衆、先なは樽井端の助三郎、是も在所の口利、彼のお婆は荷持瘤の傳が婆、ア、甚い茶喫じやがの。其處へ見へる剃下は、昔は大貧乏、年貢に詰つて娘を京の島原へ賣、大臣に請出され、奥樣に供り、聟の庇で、田も五町藏も二ケ所の分限じや。同じ傾城請る身が、我レは和女のお袋に、憂目をかける口惜い。彼の爺は弦掛の藤次兵衛、八十八で一升の飯殘さぬ、今年は丁度九十五。其處へ來た坊主は針立の道庵、彼奴が鍼で母者人を立て殺した。思へば母の敵じや」と、憂につけての恨み言、「あれ〳〵彼れへ見へるが親仁樣」梅「彼

剃下―三日月形に後方へ剃り下げる、絲髻に同じ
大臣―大盡

の綟の肩衣が、孫右衛門樣か。ほんに目元が似たはいの」患「それ程能ふ似た親と子の、詞をも交されぬ、是も親の御罰ぞや。お年も寄る、足本も弱つた、今生のお暇」と、手を合すれば、梅川は見始の見終め、「私は嫁で御座んする。夫婦は今をも知らぬ命、百年の御壽命過て後、未來でお目にかゝりましよ」と、口の中に獨言、諸共に手を合せ、咽び入てぞ歎きける。孫右衛門は老足の休み〳〵門を過ぎ、野口の溝の水氷、滑るを留る高足駄、鼻緒は斷れて横樣に、泥田へがばと輾込んだり。「ハア悲しや」と、忠兵衛もがけども騷け共、身を顧て出もやらず。梅川周章走り出、抱起して裙絞り、「何處も痛みはしませぬか。お年寄のおいとしや。お足も濯ぎ、鼻緒もすげて上ませふ。少しも御遠慮なさるゝな」と、腰膝撫て勞はれば、孫右衛門起上り、「誰方やら有難い。お蔭で怪我も致さぬ。若い上萬のお優しい。年寄と思召し、嫁子もならぬ介抱。寸道場へ參つても、これ此處の一心が、邪見では參らぬも同然、此方がほんの後生願ひ、最う手を洗ふて下されい。幸ひ爰に藁も有、鼻緒は私がすげましよ」と、懷中の塵紙を取出せば、梅川は、「好い紙が御座んする。紙捻撚つて上ませふ」と、延引裂しその手元、孫右衛門不思議そふに、「先此方は爰等に見知らぬお人じやが、何方なれば此樣に念比にして下さる」と、

つれ〴〵―つくづく
胸づばらしく―胸つまるやうにて

顔をつれ〴〵ながむれば、梅川最どむねづばらしく「ァ、我等は旅の者。私が舅の親仁様。恰當お前の年配で、恰好も其儘。外へする奉公とはさら〳〵以て思はれず。お年寄た舅御の臥惱みの抱きかゝへ、給仕へは嫁の役、御用に立ば私も何程か嬉しいもの。連合は猶親御の事、飛立ッ樣にも有筈、此紙と此紙と換て私が申ッ受け、連合の肌に著させ、父御に似たる親仁樣の、形身にさせたふ御座んす」と、塵紙袖に押包む、涙ぞ色に出にける。詞のはづれに孫右衞門、熟々と推量し、さすが恩愛捨難く、老の涙にくれけるが、「ム、和女の舅に此翁が似たといふての孝行か。嬉い中に腹が立つ。年長た悴を、子細有て久離切り、大坂へ養子に遣はせしに、根性に魔がさいて、大分人の金を過り、揚句に土地を走つて、此在所まで詮義の最中、誰故なれば嫁御故。近來愚痴な事なれども、世の譬にいふ通り、盗みする子は憎からで、繩かくる人が恨めしいとは此事よ。久離切た親子なれば、善いに付ケ、惡いに付ケ、構はぬ事とはいひながら、大坂へ養子に往て、利發で器用で身を持て、身代も仕上た彼の樣な子を勘當した、孫右衞門はたはけ者阿房者といはれても、其嬉しさは如何あらふ。今にも探し出され、繩かゝつて引るゝ時、能い時に勘當して、孫右衞門は出來した、仕合じやと褒られても、其悲しさは如何あらふ。今

はかり―限り

親は泣寄り―彭に親は泣寄り他人は食ひよりとあり世間廣う―表沙汰となる

から思ひ過されて、一日も先に往生させて下されと、拜み願ふは今參る如來樣御開山、佛に嘘はつかぬぞ」と、土にどうど平伏て、聲をはかりに泣ければ、梅川も聲を上げ、忠兵衞は障子より手を出し伏拜み、身を揉み歎き沈みしは、道理とこそ聞へけれ。猶も涙を押拭ひ、「なふ血の筋は悲しい。中の能い他人より、久離切た親子の親みは世の習ひ。盗みかたりをせふよりも、何故前かたに内證で、斯ふ〳〵した傾城に、斯ふした譯の金が要ると、密に便宜もするならば、親は泣寄り親子なり、殊に母もない悴、隱居の田地を賣ても首繩は付させまい。今では世間廣ふなり、養子の母に難義をかけ、人に損かけ苦勞をかけ、孫右衞門が子で候とて、引込で置れふか、一夜の宿も貸されふか。皆彼奴が心から、其身も狹い苦をしをる。嫁御にまで憂目を見せ、廣い世界を迯隱れ、知音近付親子にも、隱れる樣に身を持なし、碌な死もせぬ樣に親は生付けぬ。憎い奴とは思へども、可愛ふ御座る」とばかりにて、わつと消いり泣沈む、分けたる血筋ぞ哀れなる。涙の際に巾著より、銀子一枚取出し、「これは難波の御坊の御普請の奉加銀。今此處に有合た。嫁御と存じて遣でもなし、只今のお禮の爲。此邊にぶらついては能ふ似たとて捕へるぞ。連合は猶以て。是を路錢に御所海道へかゝつて、一足も早ふ退つしやれ。

逆樣な回向―親が子を弔ふなど云ふ

こなたの連合にも詞こそは交さずとも、ちよつと顔でも見たいが、いや〳〵それでは世間が立ぬ。何卒無事な吉左右を」と、涙ながら二足三足、行きては還り、「何んと逢ふても大事あるまいかい」梅「なんの人が知りませふ。逢ふて遣て下さんせ」巽「ア丶大坂の義理は缺れまい。何卒して逆樣な回向させなと、念比に賴みまする」と咽返り、振返り〳〵、泣く〳〵別れ行く跡に、夫婦はわつと伏轉び人目も忘れ泣居たる、親子の中こそはかなけれ。忠三郎が女房、雨に濡れて立歸り、「待遠に御座りませふ。此方の人は庄屋殿から直に道場へ參られ、それ故逢ひも致さず。最ふ雨も霽れかょる、追付今に戻られふ」と、いふ所へ忠三郎、息を切て駈來り、「これは〳〵忠兵衛樣、親仁樣の咄で段々聞て來た。此方の事で此在所は、大坂からいぬが入り、代官殿から詮義ある。劒の中へ晝日中、運の盡たお人じや。此方の振を見付たやら、俄に在所家竝のかたはしから家探し、親仁樣を今探す、是からわしが家の番。親仁樣はいとしや、早ふ脫してくれよとて狂亂になつてじや。鰐の口とは只今、サア〳〵裏道からごせ海道、山へかょつて退つしやれ」と、いへば夫婦は狼狽ゆる、女房は譯知らず、「私も一所に退きましよか」夫「阿房らしい」と引退て、夫婦に古簑古笠や、雨のあしべも亂るょ心、死しても忘れぬ此情、深く忍びて出

唐戸―長持

めんない千鳥―目なしどち　水の流れ云々―諺に水の流れと人の行へは知れぬものとあり

けり。忠三郎先嬉しいと息を吐いだる處に、庄屋年寄先に立ち、代官所の捕手の衆、忠三郎が門口、背門口二手になり、どや〳〵と込入て、筵を捲り簀子を破り、唐戸、米櫃、灰俵、打返してぞ探しける。「土間かけて二十疊にも足らぬ小家、何處に隱れん樣もなし。此家は別條なし、野道を探せ」と云捨て、茶園畑の間々を、駈立てこそ三重通りけれ。親孫右衞門跣足にて、「如何じや〳〵忠三郎、善か惡か聞たい」忠三「ァヽ能い〳〵氣遣ない。夫婦ながら、何事無ふまんまと落し濟した」父「ハァヽ有難い忝い如來のお庇、直に又道場へ參りて、御開山へ御禮申そふ。なふ嬉しや有難や」と、二人打連れ行處に、「龜屋忠兵衞、槌屋の梅川、只た今捕れた」と、北在所に人だかり、程なく捕人の役人。夫婦を搦め引來る。孫右衞門は氣を失ひ、息も絶ゆるばかりなる、風情を見れば梅川が、夫も我も繩目の科、眼も眩み泣沈む。忠兵衞大聲上げ、「身に罪あれば覺悟の上、殺さるゝは是非もなし。御回向賴み奉る。親の歎きが目にかゝり、未來のさはりこれ一ツ、面を包んで下され。お情なり」と泣ければ、腰の手拭引絞り、めんない千鳥百千鳥、泣くは梅川河千鳥、水の流れと身の行衞、戀に沈みし浮名のみ、難波に遺し留まりし。